# 崔書勉先生と私　『院長とのイスラエルでの忘れ得ぬ九日間』

木内　孝

**昭和五十四年四月二十四日（火）** 一四時一五分村松剛教授を団長とする我々十一人は、オランダ航空八六二便に乗り込み成田空港を飛び立った。この十一人のグループは、村松剛教授に父・木内信胤が「有志でイスラエルへ行こう。計画を立てて頂けないか」とお話して始まったと記憶している。その話を耳にされた崔書勉院長が参加を希望され、一回の下打ち合わせで九泊十日の計画が出来上がったようだ。その後、父・信胤が痛風を拗らせ飛行機の長旅は無理との残念な話になり、一名不参加で十一人に落ち着いた経緯があった。

目的は中東イスラエル国で九日間を過ごすことだった。

十一人の若者は　1．村松剛教授　2．崔書勉院長　3．高橋正男　4．関野英夫　5．小山久美子　6．丹羽春喜　7．大野俊三　8．藤島泰輔　9．青木一能　10．村松聡　11．木内孝

出発の前夜、東京イスラエル大使館で大使主催の結団の夕べが催され、改めて十一名の仲間意識が醸成された。

**二十五日（水）** 早朝五時一五分ギリシャ・アテネに到着、空港での八時間の待ち時間に市内に繰り出し、活字で理解しているアテネの街を興味深く実地検証した。

同日一三時二五分ＴＷＡ機でチョット名残惜しいアテネを発ち、一四時二〇分待望のテレアヴィヴに到着。空港内で地元産のオレンジ・ジュース、グレープフルーツ・ジュースがふんだんに振舞われるのに感激、「イスラエルは素敵だぞ！」の第一印象をシッカリ脳裏に焼き付けた。と思った瞬間、振り返って見ると壁に七年前の昭和四十七年に岡本公三等が残した弾痕が生々しくギョッとした。テレアヴィヴ市内のフォーラム・パレス近くのダン・ホテルに投宿。

**二十六日（木）** はテレアヴィヴ大学を訪問、午後は労働党本部で要人と面談。宿泊は同じフォーラム・パレス近辺

のアラジン・ホテル、段々アルコール摂取量が上がって来る。

**二十七日（金）** メギッド丘を訪れた後ハイファ大学を訪問、校庭にエルサレムの町の正確な模型があって我々の興味を惹いた。山本七平さん（イザヤ・ベンダさん）とお会いして暫く立ち話、終って近郊のドルーズ村を訪れる。

**二十八日（土）** 北方約十キロ、海沿いの歴史的に名高いアッコを訪問、この地に監禁されていた最近まで実在していた著名な人名を見付け感慨無量。更に地中海沿いにレバノンとの国境まで足を伸ばし自然保護区ロシ・ハニングラを通り、待ちに待ったナザレに到着。三十一年前にシリアとの武力紛争で知られたダガニアの地を訪問。宿泊は北ナザレのハットガーテン・ホテル。

**二十九日（日）** レバノンとの国境沿いのメチューラは紛争の絶えない地域。柵を設け医療の手当てに当たって居る地帯を訪れ、ゴラン高原に向かう。昭和四十二年にシリアから獲得した戦略上の重要地点・ゴラン高原で戴く格別な味のワイン、この旅の頂点の一つ。

高原を下って聖書の話から最も発掘が盛んなジェリコに到着、エルサレムに向かうのは明日かと踊る胸を抑えてアリエル・ホテルに四日間チェック・イン。僕の同室は四晩共、崔書勉院長。四晩の実質睡眠時間は全く記憶がない。

**三十日（月）** ナチのホロコースト慰霊の地を先ず訪問。その後、歴史の宝庫・エルサレムを縦横に歩き廻り、ヘブライ大学で数時間過ごす。正に忘れられない一日。

**一日（火）** 早朝三時半には出掛けなければならないので三時頃目を覚ますと、隣りのベッドに院長が寝てられない。ビックリして“いんちょう！”と大声を上げると、ベッドの向こう側からむっくり起き上がられて何事もなかったように悠然と着替えを済まされ、キリストの墓の前でのミサにあずかる為に二人で闇の中を出発。これはタイヘン貴重な体験。

酔眼朦朧だったが多くの体験を続けながらエルサレム南方のキリスト誕生の町ベツレヘムを訪問、更に忘れ得ぬ想い出が数多く誕生。と同時に飲酒量もうなぎ昇り。

**二日（水）** ユダヤ人にとってローマと闘った歴史的な砦、マサダに登ったことは、この旅を更に印象付けた。まじかにユダヤ人の存亡をかけた争いの様子を心に描く。
マサダを下り、死海で泳ぎ、天から降って来るような大きな温泉の瀧に打たれ、エルサレムに戻る。
そして最後の酒宴。

**三日（木）** 早朝五時過ぎにエルサレムを発ち七時五〇分発のオリンピック航空でアテネに向かう。七時間半の待時間がアテネであったが、旅の疲れと飲み疲れ、巷に出て行ったお仲間が何人いたか？オランダ航空八六一便でドバイ・バンコック・マニラ経由で・・・

**四日（金）** 一九時五五分成田に帰還。楽しかった、よく飲んだ九泊十日の村松剛教授率いる十一人組は無事帰国した。想えば三十三年前のエネルギー溢れる体験！